

証空における『十住毘婆沙論』の受用について

桑 原 昭 信

一 はじめに

龍樹造とされる『十住毘婆沙論』（以下、『十住論』）を、親鸞（一一七三—一二六三）が受用する意義を起点とし、現在は師である法然（一一三三—一二二二）を始め、その周辺へと目を向けている。浄土教における『十住論』の位置づけは未だ不明確な部分もあり、この解明を目的としている。そこで、本論考においては法然門下の高弟の一人であり、浄土宗西山派の祖師である証空（一一七七—一二四七）を取り上げることとする。

証空の龍樹や『十住論』等に対する言及については、『序分義自筆御鈔』や『往生礼讃自筆御鈔』にあるが、具体的な文の引用はほとんど見られないことが、先行研究において指摘されている⁽¹⁾。証空の著作のなか、言及のあるものは他にもいくつかあるが、一先ずは上記二つを中心として精読し、『十住論』の理解と活用を確認することとしたい。

二 証空の『十住論』理解

善導の『往生礼讃』の註釈である『往生礼讃自筆鈔』に、基本的理解がよく表れている。『往生礼讃』は願生行者が日常修める六時の礼法のなか、龍樹造とされる「十二礼」を中夜讃に用いる。この前序には、

謹^テ依^ニ大經^及龍樹天親此ノ土ノ沙門等ノ所造ノ往生禮讃^ニ集^ニ在^シ一處^ニ分^テ作^シ六時^一（『浄全』四・三五四頁上）

と、述べている。この「龍樹」について証空は、

龍樹、トイハ、新譯ニハ龍猛ト云フ。（中略）終ニ、十住毘婆沙論ヲ造リテ、自力、他力ノ二門ヲ立テ、濁世ノ凡夫ニ他力易行ノ浄土ヲ授ケ給フ。歡喜地ヲ證得シテ極樂ニ往生スベシ、ト佛ノ經ノ中ニ説キ置カレテ、其ノ益ヲ顯ハシ給フ其ノ徳實ニ不思議ナリ。

（『西叢』三・二頁上）

と、註釈している。一には龍樹が『十住論』を造論、二には

『十住論』において、自力と他力の教説を示し、これらは濁世の凡夫への他力易行の浄土を教授することが目的、三には歓喜地を得証して往生浄土を果した、という三点を挙げる事ができる。また、中夜讀の註釈の冒頭においては、

次ニ、中夜ノ偈ハ龍樹菩薩ノ造、別行ノ文ナリ。楞伽經ノ説ニカナヒテ安樂國ニ往生シ給フベキ故ニ、浄土ヲ宗トスル心アリテ、十住毘婆沙論等ノ中ニ往生ヲ勸ムルノミニアラズ、別行ノ禮法ヲ作りテ、往生ノ行業ヲ勸メ給フモノナリ。（『西叢』三・七一頁下）

と、『楞伽經』の説示に基づいて往生浄土を宗とする心があるとし、『十住論』等において往生を勧めるだけではなく、別して「十二礼」を造って往生の行業を勧めていると。

以上、証空の龍樹や『十住論』、そして「十二礼」についての基本的理解を確認することができた。『楞伽經』や「十二礼」の依用が目立ち、所謂、伝統的な浄土教理史上の龍樹理解の踏襲である。

三 『十住論』 所説の教説の活用

『観無量寿經』に対する善導の註釈書である『観経疏』の四疏のなか、『観経序分義』に対する証空の註釈書が『序分義自筆御鈔』である。このなかに教相判釈が示され、『十住論』所説の難易二道が用いられていることに注目される。

善導は『観無量寿經』の発起序を七つに分け、この五番目を韋提希が浄土を願ひ求める因縁を明かすとし、「欣浄縁」と称する。また、善導は「欣浄縁」をさらに八つに分け、この八番目を阿弥陀仏の浄土に往生するための特別な行を、韋提希が請求することを明らかにする一段と釈している。

証空はこの一段を釈すなか、問答を設けている。

問フテ云ク、佛ハ三達ノ聖ナリ。衆生ノ機ヲ鑑ミ、時ノ宜シキヲ知リテ、法ヲ説キ給フ。韋提直チニ所求ノ處ヲ請シテ行ヲ請セザランスラ、ナホ進ミテ得生ノ行ヲ説キ給フベシ。何ニ況ンヤ、韋提所求ノ處ヲ請シ、去行ヲ兼ネタリ。佛此ノ二請ニ付キテ、光臺ニ国ヲ現ジテ、所求ノ處ヲ選バシムト雖モ、去行ヲ答ヘズシテ、重ネテ、教我思惟、正受、ト請セシムル、何ノ故カアルヤ。（『西叢』一・二二六頁下）

と、韋提希をして「教我思惟」「教我正受」と請求せしめる所以を問い、答えにおいて難易二道の教説を依用している。

答ヘテ云ク、佛教ニ於テ大キニ分チテ二アリ。一ハ、行門自力ノ教、五乗ノ用ニ課セテ是ヲ説ク。十住毘婆沙論ニハ、難行道ト立テタリ。安樂集ニハ、聖道門ト號ス。三乗、四乗、入聖得果ノ道皆此ノ中ニ攝ス。二ハ、他力觀門ノ教、一實ノ機ニ蒙ラシメテ是ヲ説ク。十住毘婆沙論ニハ、易行道ト立テタリ。安樂集ニハ、淨土門ト號ス。四十八願利生ノ謂、此ノ中ニ顯ル。

（『西叢』一・二二七頁上）（※傍線は筆者）

と、『十住論』所説の難易二道と、『安樂集』所説の聖淨二門を論拠とする「仏教」についての教相判釈を、今処において説示する証空の意図はどこにあるのか。続けて証空は、

然ルニ、韋提ノ所求、去行ノ二ノ請ヲ受クト雖モ、是行門自力ノ心ナル故ニ、佛ハ、他力觀門ノ法ヲ説キテ、濁世ノ凡夫ノ出離ヲ成ゼント思シ召ス。
〔西叢〕一・二二七頁上

と、韋提希自らが起こした、憂悩なき処とそこへ往生する行法の二つの請求を「行門自力」とし、また、世尊が光を放つて十方諸仏の淨妙の国土を現じ、韋提希に阿弥陀仏の極樂世界も見せ、願生せしめたことを「他力觀門」と釈している。

此ノ觀門ノ法ハ、自ラノ修因ノ得ル所ニアラザレバ、佛力ヲ以テ報土不思議ノ境界ヲ見セシムルニ、二ノ請ヲ答フル心アルナリ。其ノ故ハ、報土ハ凡夫自力ノ入ルベキ分ニアラザルヲ以テ、佛力加シテ是ヲ見セシムルニ、弘願念仏ノ行相顯ルベシ。然ラバ、見ル事既ニ佛力ニ依ルト知りナバ、生ルル事又佛願ニ依ルト知ルベシ。

〔西叢〕一・二二七頁上

と、さらに述べ、自力ではなく、仏力をもつてのみ諸の請求の満足を明示するのであり、このために難易二道と聖淨二門を論拠とする教相判釈を示したと考えることができる。

では、この二つの教説がその論拠となり得ているかどうか、検討を加えることとしたいが、それに先がけ、難易二

証空における『十住毘婆沙論』の受用について（桑原）

道、聖淨二門という各名目の使用について、一つ確認したいことがある。法然は『選択集』二門章において、

且曇鸞法師往生論注云謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云菩薩求阿毗跋致一有二種道。一者難行道。二者易行道。（中略）譬如水路乘船則樂。（已上）此中難行道者即是聖道門也。易行道者即是淨土門也。難行易行聖道淨土其言雖異其意是同。天台迦才同之。應知。

〔淨全〕七・五頁

と、『往生論註』冒頭の『十住論』の難易二道に関わる説示を引用し、「此中」の「難行道」は「聖道門」、「易行道」は「淨土門」と述べている。また、証空門弟の証入は『觀經疏玄義分他筆抄』において、

問ヒテ云ク、攝論ノ成佛ト往生トノ二ノ別時ハ何心ヲ顯ハスヤ。答ヘテ云ク、難行、易行ノ二道ヲ顯ハスナリ。問ヒテ云ク、然ラバ、十住毘婆沙論ノ難行、易行ト同ジト云フベシヤ。答ヘテ云ク、然ナリ。オヨソ、十住毘婆沙（龍樹菩薩）、難易二行、攝論（天親菩薩）ニ成佛ト往生ト、淨土論ノ註（曇鸞法師）ニ自力ト他力ト、安樂集（道綽禪師）ニ聖道ト淨土ト、是等ハ言異ニシテ其ノ心是同ジ。

〔西叢〕五・一四六頁上

と、各名目を同意とし、師資相承の主張を確認することができる。これらに基づき、『十住論』、『往生論註』所説の難易二道と、『安樂集』所説の聖淨二門について、論拠となり得るかどうか検討する。

◆『十住論』所説の難易二道（概要）より

佛法有^二無量門^一。如^二世間道有^レ難有^レ易、陸道步行則苦、水道乘船則樂^一。菩薩道亦如^レ是。或有^二勤行精進^一。或有^下以^二信方便易行^一疾至^二阿惟越致^一者^上。（『大正』二二六・四一頁中）

『十住論』の「易行品」において、無量の法門を「難」と「易」とに分積するなか、先ず「難」については「勤行精進」とあり、具体的には諸の難行を長い間修め、二乗に墮す危険も有することをもって、この難たる所以とする。また、「易」については「信方便易行」とあり、仏、菩薩の名を恭敬心をもって執持して称えることである。この名のなかには阿弥陀仏も含まれ、多数の仏、菩薩の名が列挙されている。

そもそも、『十住論』は『十地經』所説の十地についての解説書であり、様々な大乘經典の要説に基づきながら、大乘菩薩道の完成を目指すものであり、これが論の主題である。対象として様々な機根の者が想定され、「易行品」においては、懦弱怯劣の者が三難に陥ることなく、阿惟越致地に至ることができるよう、「信方便易行」が説かれている。阿弥陀仏や往生淨土に関する説示は極一部であり、論の主題からすれば、法然の「傍明^二往生淨土之教^一」（『浄全』七・五頁）という理解は至極当然である。諸仏の優劣は語られず、また、易

行をもつてのみ所求の満足することを明示するわけでもないことより、前の論拠としては不適當と言わざるを得ない。

◆『往生論註』所説の難易二道（概要）より

謹^ア案スルニ龍樹菩薩ノ十住毗婆沙ニ云菩薩求^{ルニ}阿毗跋致^ヲ有^二二種ノ道^{一ニ}者難行道^ニ者易行道^{ナリ}難行道^ト者謂^{ルニ}於^二五濁ノ世^一於^二無佛ノ時^一求^{ルヲ}阿毗跋致^ヲ爲^レ難^ト（中略）五^ニ者唯是^レ自力ニシテ無^二他力^一持^二如^レキス^一等ノ事觸^レ目^ニ皆是^レ譬^ハ如^二陸路ノ步行^一則苦^ニ易行道^ト者謂^{ルニ}但以^二信佛ノ因縁^一願^レスレハ生^ニ淨土^ニ乘^レ佛ノ願力^ニ便得^レ往^ニ生^{スルニ}彼^ニ清淨ノ土^ニ佛力住持^{シテ}即入^ニ大乘正定ノ之聚^ニ正定^ハ即是^レ阿毗跋致^{ナリ}譬^ハ如^二水路ノ乗船^一則樂^ニ（『浄全』一・二一九頁上）

『往生論註』冒頭において、『十住論』所説の難易二道が用いられている。「難行道」の難たる所以については、五濁の世、無仏の時に阿毘跋致を求めると示し、続けて具体的な在り方を五つ示す。それらのなかでも五番目の「ただこれ自力のみにして他力の持つなし」を本義とするであろう。

一方「易行道」については、信仏の因縁をもって願生し、仏願力に乗じて淨土に往生し、仏力住持して大乘正定聚に入ると示し、これは専ら仏力、仏願力に乗託することによって阿毘跋致に至り、遂には阿耨多羅三藐三菩提を成就するのであり、専ら仏願力に乗託することをもって「易行道」の易たる所以が示されている。

曇鸞は論全体を通して他力・仏力・仏願力・阿弥陀仏の本願力を同意として用い、末尾においては改めて自力と他力について説明し、力に乗ずべきことを聞きて信心を生ずることを勧め、自ら分を局ることを戒めるのである。自力（＝難行道）ではなく、他力等（＝易行道）によってのみ所求の満足することを明示しており、前の論拠としては適当である。

◆『安樂集』所説の聖浄二門（概要）より

依^レ二大乗ノ聖教ニ良^ニ由^レ不^下得^テ二種勝法^ヲ以^ハ排^中生死^上是^ヲ以^ハ不^レ出^テ火宅^一何^ヲ者^ヲ爲^レレ^二ト^一ニハ謂^ク聖道^ニ往^シ淨土^{ナリ}其^ノ聖道^ノ一^種ハ今時難^シ證^シ一^ニ由^去去^二ト^一大聖^一遙遠^{ナル}ニ^二ニハ由^レ理深^ク解微^一ナルニ是^ノ故^ニ大集月藏經云我^ガ末法時中^ノ億億^ノ衆生起^シ行^ヲ修^レ道^ヲ未^タ有^二一^ニ人^モ得^ル者^一當^今ハ^ハ末法現^ニ是^レ五濁惡世^{ナリ}唯^有テ淨土^一門^ノ可^キ通入^一路^{ナリ}（『浄全』一・六九二頁下）

大三大門において、生死を出離するための法として「聖道」と「往生浄土」の二つを挙げる。先ず、釈尊が滅して久しく、聖道の教えの深遠さに対して衆生の理解力が乏しいことをもって、その得証し難きことを示している。そして、既に末法である現在においては、「往生浄土」の一門のみ通入すべきと勧めるのである。道綽は第一大門において教興の所由を明かすなか、時代と人に即応する点（約時被機）に教の意義を見出し、この聖浄二門の説示と対応している。

証空における『十住毘婆沙論』の受用について（桑原）

この大三大門は『往生論註』所説の難行道と易行道の文を引用し、その末尾の自力・他力の説示、そして、他力への乗託を勧める一段の抄出で始まっている。道綽も全体を通して難行道・自力・聖道門、易行道・他力・浄土門の各名目を同意として用い、この大門を「何^ソ不^三捨^レ難^ヲ依^ニ易行道^一矣」（『浄全』一・六九四頁上）と結び、易行道に依ることを勧めるのである。聖道門（＝難行道・自力）ではなく、浄土門（＝易行道・他力）によってのみ所求の満足することを明示しており、前の論拠としてはこれも適当である。

四 おわりに

以上、証空の龍樹や『十住論』に関する理解と活用状況を確認した。基本的理解としては、伝統的な浄土教理史上の龍樹理解の踏襲である。やはり、善導の著作における『十住論』等の引用状況や、法然をはじめとする諸師の『往生論註』所説の『十住論』の難易二道の依用が目立つことも、この理由として当てはまると考えることができる。

この理解をもった活用である。『序分義自筆御鈔』所説の教相判釈においては、「十住毘婆娑論二ハ、難行道ト立テタリ」、「十住毘婆娑論二ハ、易行道ト立テタリ」と述べながらも、実際には『十住論』の原文に基づいた意ではなく、『往生論註』所説の難易二道の意として、証空は用いている

証空における『十住毘婆沙論』の受用について（桑原）

のである。厳密には『十住論』の受用とは言い難いが、上述の通り、自力ではなく、仏力をもってのみ所求の満足を明示するための論拠としては、『往生論註』所説の難易二道の教説は適当であり、一貫した理解と活用である。

他の法然の門下のなかには、『十住論』所説の易行道について様々に検討を加え、『往生論註』の説示をそのまま踏襲しない者もある。⁴これらとは異なり、証空は『楞伽經』や『往生論註』の説示をそのまま踏襲し、その正否について言及しないことは非常に特徴的であり、特記すべきことである。

また、証空門弟の実信の聞書である『法事讃積学鈔』には、「海徳初際如来」について『十住論』所説の「海徳仏」と重ねて解釈している（『西叢』三・一七五頁下）。この検討については機を改めて試みることにしたい。

- 1 中西「二〇〇九」二二六—二三〇頁。中西「二〇一」一三五、二〇八頁。井上「二〇〇五」三九—四〇頁を参照。
- 2 証空の自筆には『玄義分自筆御鈔』巻一（『西叢』一・八頁上）や、『観念法門自筆御鈔』巻上（『西叢』四・一五〇頁下）等があり、門弟の聞書には証入『観經序分義他筆抄』上（『西叢』五・二〇〇頁上）等がある。

- 3 注記には「楞伽經卷九、總品第一八（大正一六、五六九上二七）」とある（『西叢』三・九頁上）。

4 桑原「二〇一六・二〇一七」において詳述している。

〈参考文献〉

- 杉紫朗『西鎮教義概論』龍谷大学出版部、一九二四
浅井成海『浄土教入門——法然上人とその門下の教学——』本願寺出版社、一九八九
中西随功『證空浄土教の研究』法蔵館、二〇〇九
中西随功監修『證空辞典』東京堂出版、二〇一一
浅井成海『法然門下における教判の問題（二）——特に証空の教判論を中心として——』『真宗学』六八号、一九八三
前田寿雄「証空における救いの構造——行門、觀門、弘願を中心として——」『真宗学』一〇九号、二〇〇四
井上善幸「法然門下における『十住毘婆沙論』理解の諸相について」『真宗研究』第四九号、二〇〇五
井上善幸「親鸞における海徳仏理解について」『龍谷大学論集』第四六八号、二〇〇六

〈キーワード〉 十住毘婆沙論、往生論註、難易二道、証空

（浄土真宗本願寺派宗学院研究員・博士（文学））